

中田有紀子

Nakada Yukiko

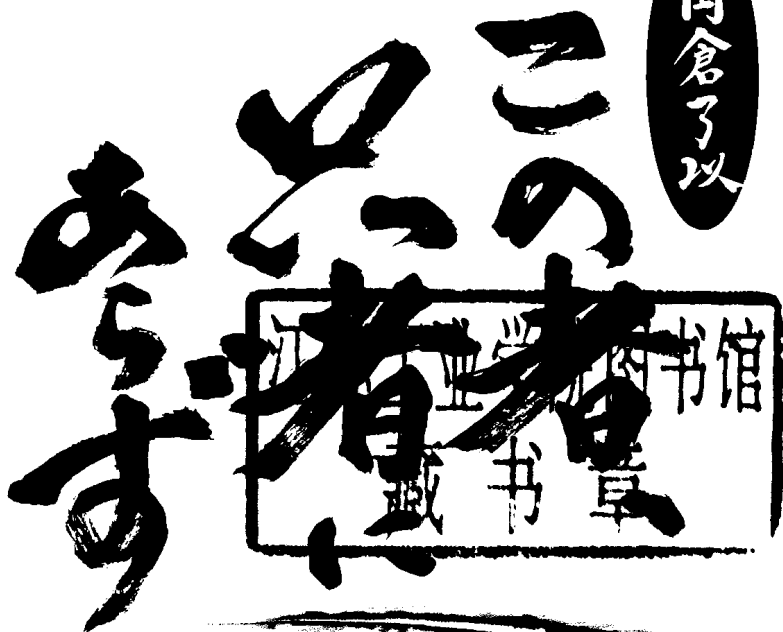
角倉了以

この者者
あらずに

中田有紀子

Nakada Yukiko

角倉了以



著者略歴

中田有紀子（なかだ・ゆきこ）

出版社勤務後、17年間、フリーの記者、ライターとして、雑誌の取材や単行本の制作にあたる。1992年、外食産業の株式会社ハングリータイガーに入社。教育室次長、取締役営業本部長を経て、常務取締役任に。当時会社はバブル崩壊後の後始末として経営手法を刷新中で、競合のなか生き残りをかけてシステムの再構築を進めていた。ようやくそれが功を奏し始めたときBSE問題の嵐に襲われ、倒産の危機に瀕する。その渦中、社長を補佐する経営幹部として同社の再建に邁進した。この間の嵐の2年間についてはドキュメンタリー『小さくして強くなった』（株式会社エフビー）を出版している。現在同社取締役相談役。

この者、只者にあらず

平成二十一年十二月三十日第一刷発行

著者 中田 有紀子

発行者 藤尾 秀昭

発行所 致知出版社

〒107-0062 東京都港区南青山六の一の二十三

TEL (03) 33409156

印刷・製本 中央精版印刷

落丁・乱丁はお取替え致します。

（検印廃止）

©Yukiko Nakada 2009 Printed in Japan

ISBN978-4-88474-870-8 C0095

ホームページ <http://www.chichi.co.jp>

Eメール books@chichi.co.jp

この者、只者にあらず

目次

一、嵯峨の土倉

二、戦乱とめぐり会い

三、港と情報と

四、本能寺の変

五、百姓になる

六、受け継がれる志

七、権力の変転を越えて

八、世のため人のため

九、天命に生きる

エピソード

装幀——川上成夫

題字——日野原 牧

カバー写真——豊島徹也

アマナイメージズ

本文デザイン——奈良有望

この者、只者にあらず

一、嵯峨の土倉

覚めた大人の目

時代は元亀（一五七〇～一五七三）に入っていた。

相変わらず天下は定まらず、織田信長をはじめ各地の群雄たちの争いで国中が騒然としていた。元亀元年、この年、南蛮船がはじめて長崎に入港した。内からも外からもなにかが沸々と湧き上がりがりつつあった。

応仁の乱終了から約百年を経たこの時代になっても、都は相変わらず戦乱のなかにあつた。足利最後の將軍義昭が旧権力の幻想にしがみついていたこのとき、「天下静謐せいへい」を理念としながら、旧体制を破壊し尽くそうとして乱世の雄・織田信長が登場しようとしていた。日本の中世はまさに終焉、近世がはじまろうとしていた時代である。

そんな激動の元龜二（一五七一）年六月五日。

午後、この季節には珍しく二日も続いた雨が止み、夏らしい日差しが射し始めた。その日の嵯峨は蒸してはいたが、よい日和だった。雨後の日差しが暑くなる一日を予想させた。京の西のはずれ、嵯峨の地は幸いなことに近江、北陸の血生臭さとは無縁の、穏やかな一日が始まっていた。

嵯峨・大覚寺領内の吉田家の土倉どやうには、雨が続けていたせいか仕分けの遅れた雑多な品物が溢れていた。帳場周辺だけでは納まらず、入り口の番所付近まで積まれている。

土倉業というのはいままで言う金融業、質屋、それに倉庫業を兼ねたような、当時としては大変な大事業であった。土倉の現場での仕事は、日々持ち込まれるあらゆる品物の値踏みと貸付、そしてその品々の整理や管理に追いまわされることだった。今日も雑多な品物を整理し蔵へ運び入れている小僧たちは、毎度ぶつぶつと文句を言っている。

「なにや、これ」

「けっ、綿入れの半纏はんてんやないか。ぼろぼろや」

前年十七歳で、この土倉の主・吉田栄可の娘・君と結婚したばかりの与七、後の角倉すみのくさ了りょう以いも、ようやくの晴れ間を無駄にしないため、せつせと立ち働いていた。

与七は数え十四歳になると、医家である吉田家を離れ、従兄弟栄可の土倉に預けられた。栄可は与七の父宗桂の兄、与左衛門光治の長子で、光治が早く世を去ったため早くから祖

父宗忠の土倉を継いでいた。他の吉田家の土倉中でも一番大きな力を持つ、いわば、角倉の本丸^{ほんまる}のような土倉である。

与七と父の甥吉田栄可の娘君との結婚は、与七を吉田家へ引き取ってすぐ祖父宗忠が、「与七は栄可土倉で修業の後、栄可の娘の誰かと娶^{めと}わせるがよい」と決めたものだった。

与七は父宗桂が外に作った子だったが、宗忠は宗桂の外胎に男の子が生まれたときからそう決めていたようである。与七を無事に吉田家に引き取り、婚姻のことも決めた後、宗忠はまるで安心したかのように一年も経ぬうち急逝した。与七の結婚は一族の長からの遺言のようなものだったのである。

与七との縁談について最初、君は与七を愛想の悪い男とばかり決め付け、若い娘らしく難癖^{なんへき}をつけていた。

「宗桂様のお子といつても、本当の奥方のお子ではないやろ。母親は上京辺りで女だてらに刀剣磨きや細工のお店をやつてはるとか。がさつな男に決まっている。おお、いやや」
栄可は祖父宗忠の指示に従い、八女ですでに山田和泉家に養女に出していた君を離縁させて連れ戻し、与七との縁組を決めたのである。

「なにを言う。与七はんは正真正銘宗桂はんのお子や。それに十歳の頃から宗桂はんのところに引き取られ、吉田家の人間として育ってきた。それに商いしてはるのは母親の女親や。そのお方が朝廷でも重責にあるお方のところへ商いで通うちにお子をお生みやした

て。まあお公卿こうきやうはんのご落胤らくいんというところやが、その生まれたお子が与七の母親や」

「ほんならご落胤やらを宗桂殿はお側女そばめはんにしはったんか？ 豪儀なことやなあ」

「なに言うとりんや。その女のお子は生まれたときからずっと病弱だったそうや。男親が宗忠様と親しいお付き合いがあったので宗桂はんに診てもろうていたのや。そのうち先方からの無理にも言うてのお頼みがあつて、それで宗桂はんはんと宗忠様が相談されて面倒見ることになったと聞きましたえ」

「なんで病氣の娘を押し付けはったんやろ」

「その娘御は到底長くは生きられんいうことやったんや。それにその娘御は宗桂先生を慕つておられた。それを親が不憫に思われ、せめてその子に生きた証をあげたかつたのやないか。宗桂はんも宗忠様もそれを察して親御の願いを受けはったと聞いている」

「難儀やなあ。母親は亡くならはったんか？」

「ああ。与七が生まれて二、三年もたたん頃やいうことや。お祖母様のしま殿は長生きで、まだ商いしてはるけどなあ。それで与七はんは十歳を過ぎた頃吉田に引き取られたんや」

与七の祖母は当時としては珍しく、職人であつた父親が病いに倒れたあと、女ながらに家業の刀剣磨きの店を引き継いだ。だが、さすがに父親の亡きあとはその家業は廃すたれた。とくに同じ上京に刀剣の「磨研とぎ・淨拭めいふ・目利めき」を家職とする本阿弥家に光二、光悦と続いて二代の名人が出現してからは、京では他の小店では刀剣を扱うなどということすら憚はばられるような具合になつていた。

そこで女主人のしまが知恵を絞ったのが、もともと父親が余技で細工していた刀の鍔、襖や簞笥の金具、根付や簪などの工芸の小物であった。しまは氣丈なうえに誇り高かったのか、子供を生んでもその男の世話にはならなかった。というより、病気で倒れた父と老いた母を残しておくわけにもいかなかったという事情もあった。それに本来商いが嫌いではなかったのである。経済的にはあまり恵まれているとも思えぬ好きな男に負担をかけてまで、その陰で細々暮らすことなど「辛氣臭いことや」とも思ったのだろう。そういう豪儀なところのある女であった。

しまはその公卿を「あのお方は私の情人（いい人）」と言って憚らなかった。

しまはその「いい人」や宗桂の縁で中国や南蛮渡りの高価で珍しい宝石や材料を入手して、職人たちを指揮しては他にはないような美しい細工ものに仕立てあげていた。

琥珀や翡翠、珊瑚、象牙や鼈甲など当時入手できる最高の材料を使う、凝った細工物は金持ちの町衆を中心に人氣がでた。

与七に関わるさまざまな事情を諄々と話してきかす栄可の話を聞いてから、君の態度は少々軟化した。

「誰のお世話にもならず、商いしながらお子を育てはったんか。なかなか氣丈なお方やな」「そうや。与七はお母はんのぬくもりを知らんのや。やさしうしてあげないといけん。

そもそもこの縁談は宗忠様から直々のお話や。よい婿殿になるはずや」

最初、「おお、いや」とは言ったが、この三年ほど栄可の土倉に預けられた与七を見て

いる間に、君は与七のことをそう悪くは思わぬようになっていた。与七は同じ従兄弟の宗恂（意安）や侶庵のようにむずかしい漢籍を読むことはなかったが、幼い頃より論語などの勉強をしていて頭脳も明晰だった。もともと仮に君が縁談をいやがったところで、親族間で決められた縁談は遂行されたのであるが。

君の父栄可と与七は従兄弟に当たるから与七は従兄の娘と縁組したことになる、かなりの近親結婚である。しかし当時の豪商の家では親族間の縁談は当然のこととして重視された。京の町衆のなかでも代表格のひとつ、刀剣の研磨や鑑定を業としていた本阿弥家に次のような家訓が残されている。正確には家訓といえるかどうかはわからぬが、『本阿弥行状記』のなかで光悦の母妙秀は、「一族のなかに適齢者がいるのによそへ嫁がせるのはその娘に疵があるようだし、また身内によい相手がいるのに貰わないのは情に欠けているようだ」という内容の一文を残している。

一族やその経済力の結束を図るため、豪商の家ではこのような親族間の縁組が行われていた。吉田家で見てもその傾向は顕著である。のちの話になるが、与七の息子与一の妻は栄可の弟幻也の娘、栄可の息子休和の妻も幻也の娘という具合だ。

祖母は最初から与七を宮仕えに上げる気はまったくなかったようだ。与七には自分の力と知恵を存分に發揮して生きられる世界で生きてもらいたい。しまはそう願っていた。

それは無理を言ってまで宗桂に娘の世話を頼んだときからの心づもりだったようだ。孫

を御殿勤めに上げたくないという気持ちと同時に、また一方で、よほどに吉田家と宗桂の人柄を見込んでいたようである。

そうした育ちのせいか、与七は土倉で働くには十分過ぎるほどの読み書き、算盤はもちろん、人との応対もきちんとできていた。栄可夫妻は成長した与七に対面したとき、じつはひと目で気に入り、「さすがお血筋だけのことはある」と思ったのである。

嵯峨とはちがい人も多い繁華な町場で、しかも気丈な祖母に躰けられたせいも、与七にはきりりとしたところがあり、男としての強さがすでに感じられたのである。

吉田家の土倉は与七の祖父宗忠が父宗臨在世中に興したとされている。宗臨の代にはすでに屋号『角倉』の名が記録に残っている。その頃の角倉の屋号は土倉に限らず、酒造、帯、金融、医薬などあらゆる分野にわたった医家吉田家の商い上のものであったろうと考えられている。だが、土倉角倉を大きくしたのは宗忠である。

その角倉で働くようになったばかりの与七を見て、古くから土倉にいる番頭たちは思わずこんな話を交わした。

「与七はん、どこぞでもう働いてはりましたんちがうやろか」

十四歳ではじめて土倉で働くようになったとき、与七はすでに帳面を間違えずに読むことや記帳することができた。また土倉の仕事の事務的な面を即座に覚えていく頭のよさで古参の番頭たちを驚かせたのである。

はじめての仕事とは思えぬ的確な判断や返答、手配の仕方に番頭たちは舌を巻いた。

「医者宗桂先生とこのほんと思うとつたが、こりや侮れんわ。やつぱり吉田家のお人や」栄可のもとに預けられて以来与七はひたすら勤勉に真面目に働いていた。このときの与七には足利將軍義輝が三好義繼、松永久秀に殺されたこと、岐阜から織田信長が虎視眈々と天下を狙い始めていることなど、眼中にないかのようなようだった。

だが、実際の与七の関心は決して土倉だけにあつたのではない。

朝廷から公卿、学者、豪商、武家あるいは異国の人間まであらゆる人々との交流や往来の多い吉田家の人間として、与七は早くから世の中のことを知らず知らずに学んでいた。それだけでなく、与七は生まれてからずっと世の中のことをじっと醒めた目で見てこなければならなかつた事情もあつた。その目は世間の十四歳としては破格に大人の目であつた。

そういう意味では、与七がひたすら土倉の仕事に精を出していたのは、[〃]やけのように[〃]なつていたからか、あるいは己の思いを隠していたのか、どちらかということでもあつた。

表面的には与七にはそんな様子はまるで伺えなかつた。うっかりしたら実直な雇い人、丁稚^{ていぢ}の一人としか見えないくらいの真面目な仕事ぶりだつた。

栄可の婿というだけでなく、最初から与七はその実力と真面目さで土倉の人間たちに軽んじられなかつたのである。なかにはその能力を逆に嫉むものさえいたくらいである。とくに同輩ともいふべき小僧たちのなかにはそんなものもいた。

「与七って小僧、なんやら小癪な奴やなあ」